『教行信証』学習会７回目講義　　２０２１年３月１日

学習形態　　新型ウイルス非常事態のためネット上で講義。自学。
テーマ　　『教行信証』とは何か。

―　『教行信証』撰述の意図　―

（続）『証巻』について

（１）前回の応答していて思いついたんですけど、『正信偈』の源空上人のところに「真宗の教証、片州に興す」と述べられています。これは「真宗の教行証」という事で、「真宗という仏教を日本に興された」ということでしょう。いわば独立宣言です。仏教での独立宣言は何によって行われるかと言えば、正依の経典に依るわけです。それで正依の経典になるべき条件というのは、「出世本懐経」が何かに依るわけです。

それで真宗の正依の経典は『大経』というわけです。天台宗では『法華経』ですね。そんなわけで『法華経』は用いられなかったのではないかと思われます。親鸞も法然も天台出身ですから、天台からの独立。特に親鸞の叡山時代の生活などをみると、親鸞聖人にとっては独立というよりも天台との決別という気持ちがあったんではないかと思います。それが「六角堂の夢告」に私は感じます。

それでは『大経』の出世本懐は何かといえば「佛佛相念」です。相念という事は佛佛対面に展開していくんではないかと思われます。佛と佛との出会いです。それが教巻で、釈迦と阿難の出会いによって示されております。釈迦が阿難を佛として出会っていくんです。

このことが『証巻』の「種々身の示現」につながってくるわけです。自分の前に如来の種々の身が示現するという事は、そういう如来に出会うという事ですね。出会わなければ「示現した」とは言えないからです。そしてそれが佛佛相念ならば、出会った私も佛と等しいことになる。それが正定聚の数に入ることではないでしょうか。

（２）もう一つ、題名に『顕浄土・・』と「顕」で表されていますが、この「顕わす」で表されているのは『教』と『証』と『化身土』だけです。ほかの『行巻』『信巻』『真仏土巻』は「案ずる」で進められていきます。この違いも学びのなかに組み込んで、考えるヒントになれば、と思います。「顕わす」とは明確になっているということであり、「案ずる」とは親鸞聖人の思惟でしょう。つまり『教』と『証』と『化身土』は私の前に明確に顕わされているという事になります。また『行』『信』『真仏土』はむしろ如来の方にある、というわけですね。その如来側にあるものを私が推する、という事になりますね。そういう事も念頭にいれて学ばなくてはならないと思います。

『真仏土巻』について

さて『真仏土巻』に入りますが、まずレジメをみていただきますと、真仏土と化身土の順番が気になったので書いておきました。皆さんはどう感じられましたでしょうか。

私はまだすっきりしていませんので、申し上げることはできませんが、（法盡さんが言っ

ていたのですが）『証巻』（p290）に「法性法身に由って方便法身を生ず。方便法身に由って法性法身を出だす。」という事から言えば、それに当てはめて言えば、真仏土があって初めて娑婆が化身土になるのであって、真仏土がわからなかったら、娑婆（現実世界）はただの娑婆であるという事でしょうか。ですから『証巻』の還相回向からの展開として『真仏土』『化身土』の順番で開かれてくるんだろうと考えることができますね。

【これは、宿題にしますけれども、この「法性法身と方便法身」は「広略相入」を示現するということを言っているわけですね。それでこの『教行信証』を「広本」、『浄土文類聚鈔』を「略本」と読んでいますが、この二書は「広略」関係としてみていいのか、という事がひっかっかっています。私個人としては「因果」関係ではないかと見ています。勿論法性法身から方便法身が生ずるのですから、因果ともとれるわけですけど、その逆は言えないような気がします。とりあえず私の宿題にしておきます。】

課題２０　第１２・１３願、光明無量・寿命無量の対象は何か。願文を見ると佛の光明・寿命なのか国土の光明・寿命なのか、記されていない。

まず、願名ですが、この光明無量と寿命無量は阿弥陀仏の光明と寿命だと、ずうっと思っていましたが、そうなると国土成就の願はいったい何なのかという疑問を持ってしまうわけです。成就文を見てもそこには無量寿仏の異名が述べられているだけですね。唯一『平等覚経』に「無量光明土に至る」と出てきますが・・・。

それであらためて願文を見てみますと、第１願から 11 願までが国のことについて述べられ、１２・１３願をとばして１４～１６まで（以下省略）という風に国土に関する願文が述べられていますね。この流れでみますと、１２・１３願に「国土」という文言が中にはなくとも国土の内容であるとも取ることができます。

ですから、（ｐ３２３に）「真土というは無量光明土、あるいは諸智土と言えり」といわれるわけでしょう。また（ｐ３２１には）「弥陀の本国は四十八願なることを明かす」ともいわれるわけですから四十八願すべてが浄土建立の勝因であるということです。つまり本願に酬報するという事でしょう。そして「真仏土」とは、阿弥陀仏が即ち浄土であり浄土は阿弥陀仏という仏身があってこそ国土となるわけです。身土不二です。

日本という国土は国民があってこそ成り立つのであり、たとえ日本国民があっても国土がなければただの難民でしょう。この譬えは正しいかどうかわかりませんが、この譬えで行きますと、浄土の人民は阿弥陀仏となりますので、ちょっと無理なのかもしれません。上記の「身土不二」とはどういうことか、という事をもっと探求すべきでしょう。皆さん方からのご意見を頂戴したいと思います。

参考課題：また、願文の事ですけど、これまで学んできて『証巻』まで「～の願より出でたり」と述べられていましたが、この『真仏土巻』『化身土巻』において「すでにして～願います」と述べられていますね。前の方は「～から出てきた」と

いう動的表現、後の方は「すでに有る」という完了的・静的表現がとられています。これをどう見るか、これから真化の浄土を学んでいくキーワードにもなるのではないでしょうか。【問題は化身土の 19 願 20 願がすでにある、という事です。これは、私は 18 願からの展開だと思っていますので、すでにあるのではなく、18 願の唯除を受けて開かれてくる願だと思うんです。これはいずれも「十方衆生」という呼びかけでしょ。これは化身土で考えていかなければならない課題だと思っています。】

課題２１　『行巻』では「無碍光如来の名を称する」といわれ『真仏土巻』では「仏はこれ不可思議光如来」と言われる。この願名の違いは何か。

私はこれまで、親・鸞という名告りにもなっている、『行巻』では天親菩薩の言葉、『真佛土巻』では曇鸞大師の言葉を配置したんだと単純に思っていましたが、単に七祖に対する“おべっか”ではなかろうと思います。とするならば、仏名を違わせた理由があるはずですね。（無碍光は『行巻』のとき述べたと思いますが）今、「不可思議光」について申し上げますならば、思議を超えている、という事ですね。誰の思議かといえば、二乗の人の思議です。憬興師は（ｐ３２２）「二乗の測度（しきたく）」を超えているというわけです。二乗とは我々凡人の事ではありません。れっきとした仏教者のことではないかと考えます。「測度」とはどういうことですかね。きちんと分析をするという事でしょうか。七地沈空の難を二乗地に堕するとも言われるのでそのことから考えるのも一つの手なのかもしれません。

すなわち、「真仏土」というのは七地沈空の難を超えている、超えた世界、八地已上の世界という意味を示しているのではないでしょうか。この時「土」というのは「地」との対比においてどういう相違があるのか、それともほぼ同じ概念なのか「真仏土」を考えていくヒントになればと思います。

課題２２　「酬報する」という事を考える。

私たち浄土真宗の門徒と名乗っていますが、本当に浄土というものを実感しているのか、と問われればなかなかイエスとは答えられないんじゃないですかね。特に現代は唯物史観で思考するもんですから、「浄土というのは観念だ」という風に考えてしまうわけです。果たしてそうでしょうか。どなたかの『観念の浄土』という本があったような気がしますが･･･。でもそうじゃないと思うのは「酬報する」ということがあるからです。「酬報」という現象があるという事は単なる観念ではない。この酬報するということをきちんと感得しない限り浄土は解らないんじゃないですかね。「酬報」とは「むくいこたふ」という意味ですが、これをどう感覚するか、ですね。

レジメに書いてありますｐ３１８をお開きください。ここに『玄義分』を引用して「弥陀浄国は当これ報なりや、これ化なりや」とあります。『正信偈』には源信のところに「報

化二土正弁立」とあります。なぜ善導ではないのか。これは保留しておきますが、善導は「西方の安楽・阿弥陀仏はこれ報佛報土なり」と述べ、そして「報というは、因行虚しからず、定んで来果を招く。果をもって因に応ず。かるがゆえに名付けて報とす」と述べられています。これは言ってしまえば、従因向果と従果向因が相即しているという事が「報」であるという事です。

これはどういうことかと言えば、因を全うするために種々の応化を示してくる。それは最初の結果から外れていたとしても因に向かって歩んでいる道なのだ、という事でしょう。そういうことを親鸞聖人は「それ報を案ずれば、如来の願海に由って果成の土を酬報せり」と結ばれています。つまり、これは方便という事です。『証巻』（ｐ２９３）に「かの仏国はすなわちこれ畢竟成仏の道路、無上方便なり」とあります通りです。

課題２３　「常」「楽」（我）「淨」→大乗の涅槃や仏性に具わる四つの徳。

この「常楽我浄」とはご存じのように覚り・涅槃などに具わる四つの徳と言われるものですね。ですからこの真仏土においては四徳が具わるという事は当然のことです。しかしこの「真仏土」では「我」だけは外されています。何故でしょうか。「常」「楽」「浄」は土について表され、「我」は身について述べられていると考えれば、この時の「身」は我々衆生を指しているのか。そうならば我々はまだ真仏土にはいないことを示しているのだろうか。身が如来ならば、身土不二なので、わざわざ「我」という必要はないのでしょう。この時の「我徳」は言ってみれば「自在人」という事なので人を指していることに間違いありません。

この「常楽浄」が『真仏土』においてどういう意味を成しているのか、各自考えていただければと思いますが、次の「仏性」が「常楽浄」の内容と重なって述べられていることからも、「我」がないことと「仏性」と関係があるのでは、という事も感じます。

課題２４　「仏性」→仏性論が真宗にどのように影響しているか。

世親の『仏性論』巻一に「一切衆生悉有仏性」という事が言われていますよね。この仏性論は各宗でそれぞれの説があり、各宗の論戦の題材になっていたようです。という事は、真宗の立教開宗のためにも仏性を論じる必要があったのではないでしょうか。

この『真仏土巻』において、まず本願文成就文が述べられ、そして「仏性」に関する引文が引かれていきますね。①まず「常」のところで「仏性は常、仏性は即ち如来なり」と述べられ、②そして「仏性未来」が説かれる。これを説くことにおいて一闡提も仏性があることを明らかにしているのですね。という事は『信巻』で問題にしてきた「唯除」の救済を示しているのではないかと思うわけです。皆さんそれぞれ『信巻』に立ち返って考えていただければと思います。③また「聞見・眼見」においても仏性が語られ、結びとして「安楽仏国に到れば、必ず仏性を顕わす（ｐ322)」と述べられてきます。

課題２５　「真宗の正意」（ｐ２０３にも「他力真宗の正意」と述べられている。）
→『真仏土巻』と『行巻』との関係

この「真宗の正意」という言葉が『真仏土巻』（ｐ３２４）と『行巻』（ｐ２０３）に出てきます。ほかには出てきません。この二巻だけが正意が述べられている、という事でしょうか。ここのほかにはないのか、そして正意とは何か、気になりませんか？

ここでは「いま真佛・真土を顕わす」という事が真宗の正意であるといわれています。『行巻』では「真実の行信は選択本願の行信であり、その機は一切の凡愚であり、往生は難思義往生、仏土は報佛報土なり」これが他力真宗の正意であると述べられています。そうしますと、突き詰めると真実報土を顕わすことが真宗の正意・本当の意志・真意であるという事になってまいります。

そういたしますと、この学習会のテーマである『教行信証』撰述の意図は何か、と言えば「浄土を明らかにする」という事になってくるのではないでしょうか。つまり浄土に往生するという事よりも、生まれようとする浄土とはなにか、という事に力点があったのではないか、と思うのです。

ところが、当時の人々、あるいは私たち現代人は、ただ素晴らしい世界、天国のようなイメージの世界を考えているのではないでしょうか。親鸞聖人は、そういう我々に対して阿弥陀が願われた浄土の救済を明らかにするために、浄土の真実性を明確にされてきたと、ここで確信できるのであります。

そういう意味でいえば、『行巻』と『真仏土巻』との関係は因と果の関係であろうと思います。仏道的に言えば『行巻』が因で『証巻』が果。でも以前に問題にしたように『証巻』は途中である、と。還相への展開がある、と。

また、『真仏土巻』が果であるとすると、これは真実報土ですから、これを遡って因を求めれば、浄土建立の本願にたどり着くことになるわけです。という事は、『行巻』の「本願一乗海」に行き着くわけです。そういたしますと「行」とはこれまでの仏道的な行ではなく本願力回向による如来の行として見えてくるわけです。

とするならば、もう一度「行とは何か」という事を考え直さなければならなくなります。行とは修行という意味合いがあります。それから言いますと個における行為と結果という因果関係の発想になってしまいます。自分の上に結果を生み出すためには、自分で努力（行動）しなければならない、という発想です。私たちは、これが因果の法則だと思っているのです。全く他者の行為ではいけないと思っているわけです。でも仏教では因縁生滅を道理としているわけですね。因と縁によって生じたり滅したりするのが道理です。そうしますと自分の努力だけで望む結果になることもあれば、全く他者の縁だけで望む結果になることもある、という事です、極論を言えば。

要するに、自分の努力ではなく全くの他者（如来）の力で浄土に生まれることもある、という事になるわけです。ですから、「行」は如来の行であっても別に問題はないわけです。むしろ問題は、自分の往生は自分の因で行かなければならない、と思っていることなんで

しょ。これが『化身土巻』の仏智疑惑の問題へとつながっていくわけです。

この巻の結釈に「願海に真あり仮あり。ここをもってまた仏土について、真あり、仮あり」と出てまいります。ここで宗祖は「仮」の字を使い、そして「方便化身・化土と名づく」と述べられています。仮と化はどう違うのか。それを考えれば、この文章、「良に仮の仏土の業因千差なれば、土もまた千差なるべし。これを方便化身化土と名づく」がヒントになるのではないでしょうか。ここに「仮の仏土」と「土」が出てきて、「土」は「化身化土」である、というわけでしょ。そうすると、「仮の仏土」と「化身土」とは違う事になるわけです。

このことを思案するに、「仮の仏土」とは願海から生み出された仏土ですね。ところが「土」とは私たちの現実世界を指しているのではないかと思うんですね。そしてその現実世界が「仮の仏土」によって「化身土」となっていくんではないかと。

皆さん方、この**「仮の仏土の業因千差なれば、土もまた千差なるべし。」**をどう読むのかご意見いただきたいと思います。今回はこれぐらいにしておきましょう。　　（了）